

「上越だより」

上席 下西 隆子（本城町在住）

こあいさつ

わたしは、三重県松阪市出身です。十八歳までは「土着民」でしたが、大学進学のために故郷を離れてからは、日本各地を転々とするようになりました。

上越には、昭和六十三（一九八八）年九月に転入しました。それ以来、二十三年間上越の地で暮らしております。

「上越」というところは、わたしにとって、暮らしやすい街です。

日本海側であり、降雪地帯の上越と故郷の松阪とは、違いもたくさんありますが、それにも増して、「故郷の空気」を思い起こさせる共通点を見いだせるからでしょう。例えば、「人口密度」とか、「城下町」とか「田舎度？」とか。そして、「上越」はわたしにとって「不思議がいっぱい」、「宝がいっぱい」の街です。

わたしの姪（姉のこども）が、学習塾（寺子屋かめい）の講師をしていて、そこで出している月刊情報誌「てらこや新聞」にエッセーを書くことになったのは、ちよつとしたきつかけでした。一つは「雪」、もう一つは「地震」の経験。

このたび、「ふるさと上越ネットワーク」会報に、掲載していただくことになり、とてもうれしく思うと同時に、手厳しい意見も頂戴するのかと恐れも感じています。

上越の人には、当たり前のことが、他所の人には珍しいということがしばしばあります。「他所の目」とそこで暮らす「わたしの生活」、どうぞ一読ください。

平成十三年六月 下西隆子

宣長さんと轍次さん

（二〇一一年四月）

しきしまの やまごころを
人とはば 朝日ににほふ

山桜花

これは、本居宣長の作った和歌です。わかりやすく言うと、「やまごころ」（日本人の心構え）は何ですが、と問かれたならこう答えましょう。たとえて言えば、朝日に映えて美しく輝く山桜の花のようなものです。日本人の心映えが桜の花のような、本当にうれしいです。（太平洋戦争中は、桜のようにばつと散る潔さこそ美德、と教えられたようですが。）

松阪で有名人と言えは、なんといつても「本居宣長」（一七三〇～一八〇一）です。「寺子屋新聞」でも、一月号から「不思議な宣長さん」という連載が始まり、とても楽しみにしています。宣長さんの第一の功績は、「古事記」の全編を註釈し、四十四巻の注釈書「古事記伝」を作ったことでしょう。三十五年をかけた「古事記伝」編纂の仕事は、手法（実証的・文献的）や内容（例えば、古代の日本人の精神を解明）においても、後の国語国文学や日本史の研究の基礎になっているそうです。

わたしは、大学で国文学の教室に籍を置いていましたが、指導してくださった教授は、わたしが松阪出身であると知ると、親しみを込めて接してくださり、「本居宣長」がいかに優れているかを語られるのでした。宣長さんが国語国文学の巨匠であることを改めて感じました。そして、国語国文学の研究者にとって松阪は「聖地」なのです。



本居宣長の奥墓

二月二十七日、新潟県三条市庭月（旧下田村）にある漢学の里「諸橋轍次記念館」に行ってきました。ここは、長岡の北東、上越市から百キロメートルほどの場所にあります。この日は、早春の気配を感じながらも、道路沿いの残雪から今年の雪の多さを想像することができました。清流五十嵐川の瀬音が響くところに、レンガ色のがつりとした記念館（轍次さんの生家跡に建つ）はありました。建物の壁面に「行不由徑」（行くに徑に由らず）の文字が刻んでありました。この言葉について轍次さんは、「何事も大道

を行け。小道を歩いていると、必ず行きづまりがあり、…大成しない。《論語》より」と、解説しています。諸橋轍次さん(一八八三—一九八二)の一番の功績は、「親字五万余字、熟語五十三万余語を収録した世界最大の漢和辞典『大漢和辞典全十三巻』大修館書店発行」を編纂したこと。単に漢字の読み方を調べる場合は、ハンデイン辞書や電子辞書で十分ですが、国語国文学や漢文学の研究をしている人々にとって『大漢和辞典』は、漢字の音訓や意味ばかりではなく、言葉の出典や使い方を教えてくれる「知識の保存庫」なのです。学生時代、研究室に鎮座していた『大漢和』は、不勉強なわたしでも、すごいものという認識を持っていました。

轍次さんは、この大事業を昭和三(一九二八)年に始め、昭和三五(一九六〇)年完成させました。辞典出版は独力でできるはずもなく、辞典に載せる言葉の収集はもちろん、出版社関係印刷関係(難しい文字は字体の活字から作った)、紙の調達、資金の調達などさまざまな人々が関わっておりまし。いわば「チーム諸橋」の要に、諸橋轍次さんがいたわけです。そして「行不由徑」の実践者だったのです。

また、当時の日本は、戦争に突入して敗戦を迎える時代です。物不足、資金不足、空襲による原稿消失、自身の失明の懸念など、完成までには困難を極めたそうです。そうであるからこそ忍耐強い越後人魂が発揮されたのかな、と確信しました。

また、諸橋轍次さんは、二年前のNHK大河ドラマの主役、あの「直江兼統」の末裔であることを、対談集「止軒問話」とすじの道において明かしています。

直江は、あの時代の武士としては一番の学者であつたのです。直江版といつて、直江が出版したい本がたゞさん今日まで残つています。兼統の長男が戦に負けたのだからいかになり、百姓になつて、諸橋と名を変えて、昔の大庄屋みたいになつた。それが諸橋の先祖だつたというのですが、

足、空襲による原稿消失、自身の失明の懸念など、完成までには困難を極めたそうです。そうであるからこそ忍耐強い越後人魂が発揮されたのかな、と確信しました。

また、諸橋轍次さんは、二年前のNHK大河ドラマの主役、あの「直江兼統」の末裔であることを、対談集「止軒問話」とすじの道において明かしています。

直江は、あの時代の武士としては一番の学者であつたのです。直江版といつて、直江が出版したい本がたゞさん今日まで残つています。兼統の長男が戦に負けたのだからいかになり、百姓になつて、諸橋と名を変えて、昔の大庄屋みたいになつた。それが諸橋の先祖だつたというのですが、

この日、近くの食堂にて当地の名物「ひござえん」(五平餅のようなもの・こうじ味噌を付けて焼いてある)で腹ごしらえをしました。(香ばしくておいしかったです。)そして、帰り道、近くにある越後長野温泉「嵐溪荘」の秘湯につかつてきました。

三月三十日、久しぶりに松阪に里帰りし、山室山(ちとせの森)にある本居宣長の奥墓にお参りました。再訪だったので、思った以上の山登りを余儀なくされました。登り口には、

山室に 千年の春の宿しめて
風に知られぬ 花をこそ見ぬ

という和歌が刻まれていました。

三月十一日の東北関東大震災は、当地でも揺れを感じました。遠くからゆつくりと揺さぶられるような感覚が、長く続きました。十二日未明には、小刻みに揺すられ、熟睡から覚めました。前の地震では新潟県は被害がありませんでしたが、北長野・中越を震源とする後の地震では、上越市の一部でも断水や住宅の損傷など被害があつたようです。(わたしの周りではまったく大丈夫です。)

自然の営みは、千年の桜を、山室にも越後にもそして東北地方にも咲かせてくれることを信じています。こんな大災害のあとでもきっと…。

お酒博士「坂口謹一郎」
(二〇二一年五月)

次の問題に答えなさい。

(1)新潟の名産品と言えば米と酒です。おいしい米と水で酒を造るには、微生物の働きが必要であり、その微生物の働きを発酵作用と言いますが、上越市出身で発酵微生物学の世界的権威は、【?】

(2)上越市で「さけ造り」と言えば、清酒のほかにワイン(岩の原葡萄園)があります。川上善兵衛さんの国産ワインの醸造にも協力し、「ぶどう酒酵母」を発見した、バイオテクノロジの先駆者は、【?】

(3)新潟県生まれの有名な演歌歌手は、古くは三波春男、今は小林幸子でしょうか。その小林幸子の持ち歌で新潟にゆかりのある歌は「雪椿」(果木)。そして、そんな椿をこよなく愛した農学博士は、【?】

(4)石油を採掘する場所は「油田」、明治時代には上越の各地に油田があり、オイルラッシュのにぎわいがあつたそうですが、「高田石油社」という石油精製の会社を経営していた人の孫とは、【?】

(5)宮中の歌会始めの召人を勤めたこともある文化人で「うま酒は うましともなくのむうちに 酔ひてのちも 口の さやけき」の短歌を作った酒博士は【?】さて、【?】に入る人名は、だれでしょう。そう、答えはすべて「坂口謹一郎」です。

「一島英治の著書『ものと人間の文化史 麹』では、

ヨーロッパから輸入した化学をもちとして、麹菌は世界に誇る三人の偉大な科学者を育てた。…世界の醸造工業の扉を開いた化学者・高橋謙吉(一八五四—一九三三)、世界に誇る二十世紀のバイオテクノロジを先導した農芸化学出身の

応用微生物学者・坂口謹一郎（一八九七～一九九四）・・・日本のタンパク質研究を率いた生化学者・赤堀四郎（一九〇〇～一九九二）の各氏である。

と、「高峰譲吉」「赤堀四郎」とともに紹介されています。坂口謹一郎は、理・農・医・薬・工などの学部を超越した微生物にかかわる研究をしました。また、短歌を作るなど文芸にも親しみ、まさにマルチな才能に恵まれ、しかも才能を十分に發揮した人生でした。

四月九日、上越市頸城区鶴ノ木にある坂口記念館に行ってきました。三月二十日から四月二十九日まで「坂口謹一郎博士と酒と椿の祭典」というイベントが開かれていました。ここは、坂口謹一郎の父祖伝来（大肝煎りをしていた）の土地で、私が住む高田地区から西（日本海に向かつて）約十キロメートルのところ。（自身は上越市の高田地区（東本町）の生まれです。）

東日本大震災の影響でイベントのいくつかは取りやめになっていましたが、「葉縫庵」では抹茶のもてなしがありました。敷地内の「雪椿園」はユキツバキが百九十本近くありますが、まだちらほら咲きでした。木々にも地面にも椿の花びらだらけになるのは四月下旬でしょうか。



坂口記念館

この記念館は、酒造りの道具や資料を展示するエリアと、坂口謹一郎の生活を再現するエリアに分かれています。

前者は、「酒杜り館」を中心に、埼玉の酒造会社から譲り受けた機械化される前の酒造りの道具を、酒造りの工程や資料とともに展示されています。また、県内で販売されているお酒も一堂に会しています。後者は、坂口博士の住宅を模したもので（葉縫庵「留香亭」、市内吉川区に（こもお酒造りとは縁の深いところ・二〇〇三年まで県立吉川高校には醸造科があった）の旧家を移築したものです。ここは、会食や展示会場として利用することができます。

「酒杜り館」では、酒造り唄を聞くことができました。酒造り唄は「労働歌」です。「労働歌」とは、田植え歌・木挽



き歌・馬子唄などで今となつては、民謡として伝承されたもののみ聞くことができるのでしょうか。歌いながら仕事を

する意味は、同じ作業をする仲間と呼吸を合わせることで、仕事のつらさを払拭することなどの効果があります。「酒造り唄」では、その他にも必要性がある。」と実演しながら説明してくれたのは、戦時中十四歳から、蔵人として埼玉の酒蔵に奉公に出た小真真一さんでした。酒造り唄の中には「数え歌」があり、例えば仕込み用の大樽に手桶で水を運ぶ時、数え歌で何杯目かが分かったそうです。「唄半給金」という言い方で、「唄を満足に歌えないと、給金を半分しかもらえない」それほど酒造りと酒造り唄は密接につながっていました。しかし、現在では酒造りも機械化され、現場で労働歌としての

役割はなくなりしました。今は蔵人たちの公演会やCDによって保存が図られています。



スキー正宗

「スキー正宗」という銘柄の清酒を武蔵野酒造（上越市西城）が製造販売しています。その「スキー正宗」のカップ酒に、スキー発祥百周年を記念した「着物・袴の女性が一本杖でスキーをしている」イラストのパッケージがお目見えしました。あまりかわいらしいので、小林社長に経緯を尋ねてみました。

「越山正宗」を「スキー正宗」に変えたのは、昭和十年代、そのころ、市内では商品に「スキー」を付けることがはやっていました。「スキー船」「スキーせんべい」など、着物の姿のパッケージは、復刻版です。たまたま蔵の中で見つけたもの。いろいろ使ったものかからないですが、ハイウオです。

上越の蔵には、まだまだ珍しいものが眠っている！

和算家・小林百誦 そして一八四四年 (二〇二一年六月)

一八四四年十二月「北海道」の命名者といわれる探検家「松浦武四郎」(一八一八―一八八八 松阪市小野江町出身)は鰺ヶ沢(青森県)に足止めされ、蝦夷地に渡る日程を延期せざるを得なくなりしました。高野長英の逃亡の余波で…。

江戸時代 国内で独自に発展した算数・数学のことを「和算」といいます。西洋の数学「洋算」の対義語として「和算」と呼ばれました。和算家・小林百誦(一八〇四―一八八七)は、今の上越市小狼谷に生まれ、幼児より神童と言われ、特に数学にその才を発揮し和算の塾(牙蘭堂)を開きました。彼は、高野長英を匿った人々の一人として、吉村昭著『長英逃亡』に登場します。

小林は、京都、大坂の算学の大家にまなび、一家をなした。和算家で、その塾には名を轟かせて、越後はもとより上州、信州からも多くの門人が集まっていた。かれの学問探究の熱意は強く、長英から蘭学を学んだ内田としばしば文流し、西洋の天文学、測量の知識も深めていた。

江戸時代の蘭学者・高野長英はもともとと奥州羽水沢(宮城県)の医師で、江戸・

長崎にて、医学のほか蘭学を学びます。

シーボルトの鳴滝塾にも入門していました。蘭学を学ぶことは、世界情勢をよく知っていることを意味します。当時の日本の立場(鎖国)が妥当かどうかを含め、国防にも強い関心を寄せていました。それ故、長英は三十五歳の時(一八三九)蜜社の獄で投獄されます。永半を命じられ、のちに牢名主として終身刑を覚悟しますが、脱獄を企て、火事による切放し(火事から命を守るため一時的に牢屋から出す法的措置。三日後に戻らなければ重罪)により牢屋を出ます。このとき長英四十歳。三日の縛牢の約束を破り六年間もの逃亡生活を送ります。この長英の「永半」から「脱獄」「逃亡」を描いた物語が『長英逃亡』です。長英は、医師・塾での弟子・牢屋で出会う知人などあらゆる人脈を頼り、六年間逃げまわったわけです。江戸に妻子を残し、関東甲信越はもちろん、故郷・宮城までの東北四県、江戸に戻って、また香川・愛媛・広島、東海道沿線の各地。長英は、脱獄した「お尋ね者」ですから、奉行所から全国に指名手配の「人相書」が配布され、「高札」において掲示されて、厳重警戒の中で逃亡劇でした。長英が、脱獄したのが一八四四(天保一五)年八月二十九日。そして、小林百誦を頼って越後・直江津今町に姿を見せたのは、そ

の年の秋も深まったころでした。

一八四四年の上越は、高田藩主榊原政令の統治していたころでした。当時の日本は鎖国状態ではありましたが、近海には外国船が出没する時代。隣国の清では、アヘン戦争で、英国に痛めつけられていました。高田藩では日本海沿岸警備のため、さまざまな試みがなされていました。その一つが、海岸線に大筒台場を設けることで、小林百誦は、藩からその設計を命じられていました。そんな折、小林百誦のもとに「お尋ね者」高野長英が逃げ込んできました。百誦は驚いたものの匿い、近くに住む大肝煎りの「福永七兵衛」に長英の身柄をゆだねます。大肝煎りは、町民の代表として藩から大きな権限を持たされており、罪人を取り締まる側の立場だったのに、福永家文書には彼の人相書きが残されています。長英は十二月中旬まで直江津「福永宅」に潜伏・逗留し、つかの間の休息を取るようになります。そしてこの間に、小林百誦の求めに応じて、大筒台場の設計をアドバイスしたと言われています。



小林百誦の塾跡

上越の歴史家「渡辺慶一」さんは、古文書やこの地方の伝説から、長英が越後に逃亡したことをつきとめ(『続』ようえつ市の郷土史散歩)に詳しい、それが吉村昭さんの創作の参考資料になったとのこと。

五月十八日、海岸ぞいの舟見公園近くにある、昔の直江津今町、現在の越前市中央町を散策しました。ちょうど「三八の朝市」が開かれていました。多種の野菜・山菜のほか、かわいらしい花の苗もたくさん売られ、路上に彩りを添えていました。朝市の近くに「小林百誦の塾跡」の碑(中央二)が、ひっそりと建っていました。その近くには、大肝煎りであつた福永七兵衛のお屋敷もあつたはず。『福永神社』(中央四)があると聞いて、ついでに訪ねてみました。そこには、直江津の魚商人から「義人」と称されている「福永十三郎」が祭られています。福永七兵衛の先祖に当たる方です。和算家小林百誦を調べているうちに、はからずも吉村昭著『長英逃亡』に出会いました。そして、長英の生への執着心に圧倒され、長英を匿った人々の数の多さに驚き、また、その人々の「胆力」というべきものに感銘をうけました。(もちろん吉村氏の作品の力に負うことが大きいのですが。)同時に、なぜかくも多

くの人が長英に味方したのか、という疑問もわいてきました。長英の人間的な魅力もあるでしょうし、長英の学識を尊いものとしたこともあるでしょう。私は、幕末から明治維新になだれ込む、民衆のパワーの源をみた思いでした。

「洋算」を素材にした小説に『博士の愛した数式』があります。その著者の小川洋子さんは、今年の『文藝春秋三月号』で、「素数」について書いていました。今年の年号の二十三と二〇一一は素数であり、「二〇一一は連続する十一個の素数の和であり、連続する三個の素数の和である」こと。今年は「素数に囲まれた一年」であり、「素数」は「頑丈で、清廉で、粘り強い」とその魅力を書いていました。が、私には、二〇一一年がただならぬ年になる予言のように思えてなりませんでした。



下西 隆子さん